

偉大な精神たち：スティーヴン・マイヤーの次の先端的著作『神仮説の復帰』

【訳者注】今、ネット上にあふれんばかりの、ID (インテリジェント・デザイン) 運動のビデオの一つを訳してみた (22 分のうち最初の 10 分以下)。何年も前からこれを紹介してきた私にとって、この本の出版は痛快極まる出来事である。なぜなら、これを目の敵にして、あえて無視し、明らかに故意に曲解してきた人々 (科学者・メディア共同体) に対して、「ではこれならどうですか？」と言って出す本がこれだからである。「神仮説の復帰」 (The Return of God Hypothesis) とは、言い換えれば「神の存在の科学的根拠」ということで、歴史上、こんなにずばりと自信をもって本を書いた人はいない。時代がそこまで熟していなかったからである。マイケル・メドヴェドが「あなた大胆すぎる、大丈夫か？」と言っているが、大丈夫ではないであろう。今の世の中が狂っている根本にあるのは、これだけ明らかな超越者の存在を、必死に否定することで、それはほとんど殺意であるから、マイヤーは安全とは言えない。

インタビューをするメドヴェドは、実はあまり適切な相手ではない。これは読んでもらえばわかるが、この部分の中心になっている「宇宙的ファイン・チューニング」つまり、この宇宙の物理化学的数値や条件が、人間が生きるために最初から微調整されていたという事実について、彼が不思議に思っているのは、宇宙の始まりはごく小さな点であり、現在の宇宙とは比較にならないのに、なぜその微調整が**最初から**可能だったのか、ということであろう——多分。これは、デザイナーの意図が最初から働いていたということであって、その物理的実現のことではない。唯物論的にしか考えられない人は、ID は理解できない。かなり前に私も哲学的な立場から、「超自然がなければ自然は理解できない」というエッセーを書いた。Cf. 更新版：<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180320.pdf>

DiscoveryInstitute

Great Minds: Steph Meyer's Next Frontier, the *Return of God Hypothesis*

Michael Medved: 私の今日のお客様はスティーヴン・マイヤー博士です。私たちの企画に加わっていただき、ありがとうございます。今日のディスカッションは、考える最も重量感ある、かつ爆発的な、論争となる問題——神の存在の (哲学的でなく) 科学的な証明、そう、科学的な神の存在証明を、このショーで用意しています。私たちは、最も論争の種となるこの問題と取り組むことを、躊躇いたしません。これは決して消えてなくなることはありません。それは非常に重要で、かつ永遠の問題だからです。それはまた、我々がそれについて正直で、恐れなからです。人々は、非常に偏った態度を取っていて、現在、

非常に多くの人々が、科学と神、特に、神のための科学というような話題を持ち出せば、逃げ出すでしょう。しかし、スティーヴン・マイヤーはそんなことはしません。

スティーヴンは友人で、今、彼はここシアトルにある Discovery Institute の「科学と文化センター」の所長をしています。このショーもそこから出ています。彼のベストセラー *Signature in the Cell* (細胞の中の署名) や *Darwin's Doubt* の中で、スティーヴンは、恐れることなく、いくつかの正統的な考えの支配に挑戦しています。それは、科学と生命の起源、動物の生命や知的動物の起源、といった問題です。そして今、それでもまだ論争が十分でないかのように、現在計画中の彼の次の本のことを話そうとしています。そしてこれは、実は、彼がピアレビューのある雑誌に書いて、賞を得た雑誌論文に反映されています。この論文は、The Return of God Hypothesis (神仮説の復帰) というタイトルを持つもので、聴衆の皆さんは、スティーヴンについてのもっと詳しい情報と共に、インターネットのこのショーのホームページに、この論文を見つけることができます。・・・

スティーブ、誰が見ても明らかなことの一つは、あなたが「神仮説の復帰」などという論文を書けば、これまで人々があなたについて言ってきたこと、つまり、あなたが今、所長をやっている、いわゆる「インテリジェント・デザイン」ID 運動は、案の定、単なる「トロイの木馬」にすぎ、宗教的な人々がカムバックできるようにするための、仕掛けだったのではないかなどと、あらぬことを、きつと言いだすと思えるが、どうなのですか？ なぜあなたは、「神仮説の復帰」を言い出すことによって、こういう暗鬱な恐れをわざわざ招くようなことをやるのですか？

Stephen Meyer: (苦笑) 大きな問題は、我々がある種の 2 重の縛りを受けていることだ。なぜなら、我々はまた、不正直だと言って非難され、こうしたより深い問題に取り組む意欲がないといって非難されるからだ。人々が ID は宗教だと言うときには、そういうことになる。我々は、それは宗教ではないと言っている。それは科学的な証拠と、確立された科学的推論の方法に基づいている。そして生物学における ID の証拠は、何らかのデザインする (考えて作り出す) インテリジェンスが、生命の起源と歴史には働いてきたに違いないという結論を、我々にもたらすのだ。しかし、それは 2 つ目の問題、もっと哲学的な問題を我々に与えることになり、それは、そのデザインするインテリジェンスの性格、アイデンティティは何かということだ。この宇宙の生命をデザインしたのは誰だと思うのか、ということになる。そして、私はそこに現実的に科学的な証拠があり、その質問に答えるのを助けてくれる科学的な証拠があると考えている。だから、これについては、我々がこれまでに分類してきたような者ではない。我々は、創世記の解釈に、その説の根拠を置くような、多くの聖書的な創造論者ではない。我々は生物学的な証拠に基づいてデザインの証拠を推論している。しかし私はさらに別の、物理学と宇宙論からの証拠があると思っている。それが現実的に、この宇宙の生命をつくったデザイナーは誰かという、ありうるアイ

デンティティの問題に答えるのを助けてくれる。そこで私は最終的に、これらさまざまな問題について、真実は何かということに、現在、興味をもっている。また私は、このデザイナーは誰だと思ふのかという質問をよく受ける。そこで私は現実的に、それについて考えが固まってきたので、あなたが言及された論文に、それを書いたのだ。

マイケル・メドヴェド： OK、あなたはまた、この論文で、神の存在を擁護する伝統的な議論の盛衰のことを書いている。そしてこうした議論を、宇宙論的議論とデザイン論的議論に分けている。この違いはどういうことか？

スティーヴン・マイヤー： 宇宙論的議論とは、第一原因とか、最初の結果を説明する最初の原因が必要だという議論だ。そして宇宙論的議論には、2つの難しい形式がある。しかし、中世においてよく知られていたものの一つは、Kalam 宇宙論と呼ばれるもので、それは大体こんな議論だ——何でも存在始めるものは、原因を持たねばならない。宇宙は存在し始めた。したがって宇宙は、それ自身とは別の、ある原因をもっていなければならない。それが原因というものだ。中世の哲学者の論ずるその神々は、啓蒙主義の時代に、矛盾というよりも破損状態に陥った。多くの人々が、まあ最初の前提の、「存在し始めるものは何でも原因を持たねばならない」ということは認めるが、どうやって宇宙が始まりを持ったことがわかるのか、と言った。そして、その時代、この問題を解決する科学的方法がなかった。いくつか哲学的議論で、現実の無限といわれていたものを否定する考え方はあった。しかし宇宙の始まりを証明する、決定的な科学的証拠はなかった。それで、19世紀から20世紀の初めにかけて、宇宙は永遠で、自存しているという見方が、ますます欠陥のあるものになっていった。それは時間的にも空間的にも、無限ではないだろうということになった。そこには始めがあり、したがってある意味で、物質こそ、あらゆる他のものを産み出す根元だということになった。エネルギーも物質だった。

Medved: いわゆる定常宇宙説 (steady state theory) は、これに関係がありますか？

Meyer: あります。Steady state 説は、実は、世紀の初めころから普及していたが、宇宙には始まりがあるという発見、いわゆる「ビッグバン説」に挑戦されて、一種の債務不履行を支払う試みとして現れたものだ。

Medved: あなたは、ビッグバン説と、アインシュタインの一般相対性理論が、神の存在を否定する伝統的な議論に、衝撃を与えたと書いているが…。

Meyer: その通りだ。もしこの2番目の前提がカギの前提であるなら、宇宙は始まりを持つか持たないか？ それは間違いなく、科学の歴史において、魅惑的なエピソードだった。過去1世紀の間、科学者たちはその疑問に、効果的に答えることができていた。それは古

い昔からの疑問であり、はるかギリシャの昔にまで遡る。宇宙は有限か無限か？ それは永遠で自ら存在するものか、それとも、もしかして、自己自身を超えた所に、ある創造者を必要としたのか？ とにかく、宇宙が始まりを持ったという証拠は、目を見張るようなショッキングなものだった。それは多くの哲学的感性を仰天させた。しかしそれが出発したのは、1900年代で、アインシュタインの一般相対性理論の公式化とともに始まったことだ。彼の場の方程式は、始まりがあったことを意味した。そして1920年代と30年代に、天文台で観察する人々、特にエドウィン・ハッブルが、拡大しつづける宇宙の証拠を発見した。それは、こういうことを示唆した――もし宇宙が、時間的な前方へ向かって拡大しているなら、もしあなたが時間的に後方へ進んでいけば、究極的には、今、我々から離れつつあるすべての銀河系がだんだん集まって、最後にはひとつ所に戻り、すべては収縮し、宇宙それ自体から始まりを作り出すだろう。そこでそれは、理論物理学と、それとは別の天文学における、驚くべき種類の2重の発見だった。一人の科学者が、2つの離れた方向の証拠から、宇宙には始まりがあるという結論を得たのだった。

Medved: OK、私はこのことを、亡くなった父親が私に説明しようとしたので、覚えています。

Meyer: おお、あなたのお父さまには、会ったことがあります。

Medved: 彼は固体物理学者でしたが、・・・ビッグバン説について聞いてみたいことがある。これについて「多宇宙説」multiverseと言われる説があって、あなたの心をこれで掴むことは難しいと思うが、これはどういう説なのか、説明してもらえだろうか？

Meyer: よろしい。宇宙論の発見したものには、実はもう1つのすごい発見がある。第一波は、宇宙には明確な始まりがあったという発見だった。第二波は、宇宙論的物理学という形でやってきたもので、それは、宇宙が始まりを持っていたという発見に加えて、宇宙はその物質の configuration（配置形状）や、基本的な諸法則の相互関係の強さが、**最初から微調整されていた**（finely-tuned）という発見である。したがって宇宙は、始まりをもっていただけでなく、初めから微調整されていて、我々は一種の Goldilocks 宇宙に住むように、配慮されていた。（注：「ゴルディロックス」とは、童話「ゴルディロックス（少女の名）と3匹のクマ」からきた、「すべてがぴったり」を表す言葉。）ここでは、宇宙のさまざまな基本的な力、宇宙の膨張率、光のスピード、重力常数といった、すべての異なったパラメーターが、強すぎず弱すぎず、早すぎず遅すぎず、あらゆる条件が生命を、絶妙な数値で可能にしている。

Medved: はい、そういうことは、特権的惑星における諸々の一致として知っています。これは前に、正しい地球惑星として話題にしている。そこで、どうしてそれが後の宇宙に当

てはまるのだろうか？ もちろんこの宇宙は、小さな一点にすぎなかった初めより、無限により大きいはずではないか？

Meyer: まさに「特権的惑星」というのは、ある本の名前で、これは地球と局所的太陽系の微調整を論じたものだ。ところが現実には、もっと深い、より基本的な微調整があって、それが、物理学の法則そのものを決めていることがわかってきた。そして物質の始まりの根源的なコンフィギュレーション、あるいは物理学者が、宇宙の始まりにおける「質量エネルギー」と呼ぶものを決定したのだ。そして、そこにおいてこそ、多重宇宙というものが入り込んできたのだった（後に、そんなものには全く根拠がない、と言っている）。なぜなら、多くの物理学者は、50年代か60年代ころに、特にフレッド・ホイルなどと一緒に出発したが、彼は「定常宇宙説」steady-state ideaの主導者だった人だ。彼は頑固な無神論者だったが、彼の発見したこと、すなわち彼自身が発見した、微調整されるパラメーターの事実が、宇宙の背後に、あるインテリジェンスがなければならぬという結論を導き出したのだ。彼は実際にはこう言った——「この証拠の常識的な解釈は、あるスーパーインテレクト(超知性)が、物理学と化学をいじって(monkeyed with)、生命を可能にした。」彼の世界観の劇的な転換が、これらの発見のきっかけとなったのだった。

Medved: 彼は実際に monkey という言葉を使ったのか？

Meyer: 確かに monkey という言葉を使っている。私はそれが気に入っている。

(以上、全体の半分以下だが、この微調整の事実は、おそらくどんな宗教的教義よりも強力であろう。)